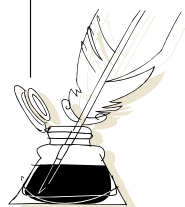


人生讃歌

山間情景

山間の情景



小説の書き出しに苦慮し、気分を変えてみようと思ふ山奥の鄙びた温泉へ出掛けた。午後の二時ごろ宿へ着いたが原稿用紙を広げる気にならず、露天風呂へ入る。空が晴れ、頭上の森から小鳥や蝉の音が降つてきて小説なんかどうでもよくなる。風呂からあがつて畳敷きの休憩室でビールを飲む。頭が空っぽで爽快だ。横の長テーブルで二人の年老いた女性が向かい合い、持参の弁当を食べながら話している。

かすれ声の女性が「あんたときどき来てるけど湯治かね」と聞いている。向かいの小柄の女性が「恥ずかしいんです、田んぼの畔から転んで腰の骨と肋骨を折つてね、週二回来てますよ」と笑う。二人はここで会つただけのようだ。かすれ声の女性が「あなた、おいくつですか」と聞き、小柄のほうの「九十五にもなつちやつて」と言つてククツと笑う。かすれ声のほうの「わしは八十八だけど、あなた若く見えますねえ。だけど九十五にもなつて、なんで田んぼになんか行くのかね」と聞く。すると小柄のほうの「あなたもお医者と同じことを言うんですね。お医者も、九十五にもなる老人が、なんで田んぼなんかに行くのかつて責めるみたいに言うのさ。だけどそんなこと言われても、どうこたえていいかわかんないのさ」

と笑う。そこで二度、言葉を切つてから「仕方ないからお医者には、そこに居たいから、そこに身を置きたいんだもの、つて言つたのさ。そしたらお医者、黙つてしまつたけど」と言つた。

それを聞いてはくは一瞬、息がとまった。そこへ身を置きたいか、と小声になった。生きるとは何かを聞いた気がしたのである。小説の書き出し、なんとかなりそうだ、と思つた。



山間にある小さな町での講演を終えた夕方近く、係の人に車で鉄道の駅まで送ってもらふ途中だった。道ばたに軒、農作物の無人販売所の看板を掛けた小屋があり、畳一枚ほどの台の上にビニール袋に小分けした茄子や胡瓜などを並べてあるのが見え、はくは車を停めてもらつて降りた。家への土産に買おうと思つた。ベニヤ板の屋根もついた小屋の柱に「代金は箱に入れて自由にお持ちください」と書かれてある。

気づくと小屋の陰に初老のご夫婦らしい二人がしがんでいて、ビニール袋に馬鈴薯を小分けしてるところだった。ぼくが「売れますか」と聞くと「形はよくないけど無農薬で味はいいためか、おかげさまで」と笑つた。聞くと、曲がつたり規格はずれの大きなものは街の店では並べてくれないため、ここで市販の三分の二で直売しているという。一日に二回、品物を並べるといふ。ぼくはつい「代金はちゃんと回収されるものですか」と聞いてしまつてから、いやなことを口にしてしまつたと後悔した。すると男の人は「失礼なことですが、初めはもし売れても代金を置いていくとくれると思つてなかつたんです。自分のことでせいじつぱいの今の世の中ですから。ところが直売最初の日、並べた野菜が全部なくなつて大喜びしましたが、恥ずかしいんですが、代金なんぼか置いてつてくれたかなど。ところが家へ帰つてこそり数えてみたら、ぴったりある

んです。驚いたねえ」

その後も季節ごとの野菜を並べて二年がたったが、一度として代金が合わなかったことがなかったというのである。「たまげました。私のほうが疑い深くなり過ぎていたんです。ほんとうに恥ずかしく、深く反省します」と男の人がつぶやいた。ぼくは買った野菜を持って車へ向かいながら空を見上げた。日暮れ近い澄んだ青空だった。横を小川が流れ、まわりの深い森は小鳥の声に満ち溢れ、麓は草原と畑の広がりがだった。美しかった。みんな、この風景に心が洗われるんだ、とぼくは思う。



挿絵/中江潤一

★

あるとき山と海が接した、農業と漁業の人が半々という二千人の小さな町に講演に呼ばれて出向いた。サイン会もしてくれるという。著書をたくさんの人に読んでもらいたいという気持ちもある。ぼくなんかの本は自分でも買ってもらう努力をしなければと考えるからである。話を聞きにきてくれる人々の事情はあまり考えたことはない。

講演は午後一時からだった。主催者が、六十人の来場予定が百人近くも来ていると大喜びしていた。講演前、ぼくはトイレの扉の中で下着のシャツを着替えた。演壇でライトの強い光を浴びて汗まみれになるため、薄い半袖に替えておくのである。その途中、四、五人の男の人が入ってきて小用をたしながら話しはじめた。知り合い同士らしく、みなぼくの話に聴きにきてくれた人らしかった。

「二時間半も何を喋るんだろうね」と中年男性の声がする。「作家は文はうまいかもしれんけど、話は面白くないのが多いからね」と別の声。そこでぼくはトイレから出られなくなってしまう、突っ立ったまま息をひそめた。「ほんとほんと。せいぜい三十分がいいとこだよね」と別の人。「俺、きょう船を出す予定だったのによお、頼むから来てくれって言われてよお」と若者の声。「おらんとこ芋掘り。女房がやつてる。役場の男、何てったつけ。あいつ、頼むから出てくれって、しつこくて参ったでや」と中年男が笑う。「しゃあないなあ」と誰かが笑う。

聞いていてぼくは息が詰まった。みんな主催者に頼まれ、駆り出されて来ているのだった。人々が出て行き、ぼくはそろそろと廊下へ出た。背中をどやしつけられたような衝撃をおぼえた。足が震えつづけた。

①